

しんぱん

しどうようもんしゅう

新版 指導要文集

だいいつしよう

しんじん

きほん

第一章 信心の基本

いっしょうじょうぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

しゅじょう

ぶっちはん ひら

ほつ

ねはんぎょう

い

「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」。涅槃經に云わ
く「大乗を学する者は、肉眼有りといえども、名づけて
仮眼となす」等云々。末代の凡夫、出生して法華經を信
ずるは、人界に仮界を具足するが故なり。

(006)如來滅後五五百歲始觀心本尊抄

一生成仏・仮界湧現 127 ページー15行)

じっかい ご ぐ

た

せきちゅう ひ もくちゅう はな しん

にんかい

によらいのめつごのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしよう

甚

がた

十界互具、これを立つるは、石中の火・木中の花、信じ難けれども、縁に值つて出生すればこれを信ず。人界所具の仏界は水中の火・火中の水、最もはなはだ信じ難し。

(006)如來滅後五五百歲始觀心本尊抄

一生成仏・仏界湧現 128 ページー 15 行)

「我がことく等しくして異なることながらしめん。我がこと

昔の願いしところのときは、今、すでに満足しぬ。

一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ」。妙覚の釈尊は
我らが血肉なり。因果の功德は骨髓にあらずや。

(006 如來滅後五五百歳始觀心本尊抄

一生成仏・仏界湧現 135 ページー3 行)

「(法華經を説いてあらゆる衆生に即身成仏の教えを与えたの

で) 仏と衆生は等しくなり差別がなくなつた。仏がその昔に
願つたところのあらゆる衆生を悟りの境地に至らせたいとの誓い

いま

まんぞく

しゅじょう

じょうぶつ

みち

い

が、今はすでに満足し、あらゆる衆生をすべて成仏への道に入らしめることができた」と（法華經方便品に）あります。總じて御本尊を信じ持つとき、私たちの血や肉は妙覺の釈尊と同じであり、仏が久遠の遠い昔から積んできた、すべての功德が骨の髓となつていくのです。

されば、この三如是を三身如来とは云うなり。この三如是
が三身如来にておわしましけるをよそに思いへだてつる
が、はや我が身の上にてありけるなり。かく知りぬるを、
法華經をさとれる人とは申すなり。

(019 十如是事)

一生成仏・仏界湧現
355 ページー3行

みょうほうれんげきょう

たい

「妙法蓮華經の体のいみじくおわしますは、いかような
る体にておわしますぞ」と尋ね出だしてみれば、我が
心性の八葉の白蓮華にてありけることなり。

(019 十如是事)

じゅうじよぜじ

いっしょじょぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

356 ページー15行

この妙法蓮華經とは、我らが心性、總じては一切衆生
の心性、八葉の白蓮華の名なり。これを教え給う仏の
御詞なり。無始より以来、我が身中の心性に迷つて生死
を流転せし身、今この経に值い奉つて三身即一の本覚
の如來を唱うるに顯れて現世にその内証成仏するを、
即身成仏と申す。

(020 一念三千法門

一生成仏・仏界湧現 362 ページー5行)

みようほうれんげきょう

とな

とき

しんしよう

によらいあらわ

妙法蓮華経と唱うる時、心性の如来顯る。

(020 一念三千法門)

いちねんさんぜんほうもん

いつしようじょうぶつ

一生成仏・仏界湧現

362

ページー9行

ぶつかいゆげん

ほけきょう　ぎょうじや　によせつしゅぎょう　かなら　いつしょう　うち　いちにん
法華經の行者は、如説修行せば、必ず一生の中に一人
のこ　じょうぶつ　おきて　たと　はるなつ　つく　わせ
も残らず成仏すべし。譬えれば、春夏、田を作るに、早・
晚あれども、一年の中には必ずこれを納む。法華の
行為者も、上・中・下根あれども、必ず一生の中に
証得す。

（020）一念三千法門

いちねんさんぜんほうもん　いつしょうじょうぶつ　ぶつかいゆげん
一生成仏・仏界湧現
363 ページー9 行

ひみつ　おうぞう　ひら
「秘密の奥蔵を発く。これを称して妙となす」。妙樂
みょう　もう　もん　う　い　かい　ほつ　かい　とううんぬん

だいし　大師、この文を受けて云わく「発とは開なり」等云々。

みよう　もう　かい
妙と申することは、開ということなり。

せけん　たから　つ　くら　かぎ
世間に、財を積める蔵に鑰なれば、開くことかた
ひら　くら　うち　たから　み
し。開かざれば、蔵の内の財を見ず。

（033）法華經題目抄（妙の三義の事）

ほけきょうだいもくしょう　みよう　さんぎ　こと
いつしようじょうぶつ　ぶつかいゆげん
一生成仏・仏界湧現 536 ページー10行

いっぺん しゅだい とな たてまつ いつさいしゅじょう ぶっしょう みな呼
一遍この首題を唱え 奉れば、一切衆生の仏性が皆よば
れてここに集まる時、我が身の法性の法報応の三身とも
にひかれて顯れ出づる、これを成仏とは申すなり。例せ
ば、籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集
まる、これを見て籠の内の鳥も出でんとするがごとし。

引

(034 聖愚問答抄上)

いっしょじょうぶつ ぶつかいゆげん
一生成仏・仏界湧現 578 ページー11行

しょうじき

ほうべん

す

ほけきよう

しん

正直に方便を捨てて、ただ法華経を信じ、

なんみょうほうれんげきょう とな

ひと

ぼんのう ごう

く さんどう

南無妙法蓮華経と唱うる人は、煩惱・業・苦の三道、

ほっしん はんにや げだつ さんとく てん さんがん さんたいすなわ いっしん

ひと しょじゅう ところ じょうじやつこうど

のうご

法身・般若・解脱の三徳と転じて、三觀・三諦即ち一心

あらわ

ひと しょじゅう ところ じょうじやつこうど

のうご

に。顯れ、その人の所住の処は常寂光土なり。能居。

しょご しんど しきしん くたいくゆう むさ さんじん ほんもんじゅりよう

所居、身土、色心、俱体俱用、無作の三身の本門寿量の

とうたいれんげ ほとけ にちれん で しだんなどう なか

当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等の中のことなり。

(038 当体義抄)

いつしょうじょうぶつ ぶつかい ゆげん

一生成仏・仏界湧現

617 ページー1行

にちれん いちもん しょうじき ごんきょう じやほう じやし
しかるに、日蓮が一門は、正直に權教の邪法・邪師の
じやぎ す とうたいれんげ しようじき しようほう しようと しようと
邪義を捨てて、正直に正法・正師の正義を信ずるが故
に、当體蓮華を証得して常寂光の當體の妙理を顯すこ
とは、本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と
ほんもんじゅりょう きょうしう きんげん しん なんみようほうれんげきょう
とな ゆえ とうたい みょうり あらわ ゆえ
唱うるが故なり。

(038 当體義抄)

いっしょじょうぶつ ぶつかいゆげん
一生成仏・仏界湧現
626 ページー10行

ひとたびみょうほうれんげきよう

とな

いっさい

ほとけ

いっさい

ほう

いっさい

一度妙法蓮華經と唱うれば、一切の仏、一切の法、一切

の菩薩、一切の声聞、一切の梵王・帝釈・閻魔法王・

にちがつ いっさい しゅうもん いっさい

ぼんのう たいしゃ えんまほうおう

ちじん ないしじごく がき

ちくしょう

ぶつしよう

しんちゅう

ひとこえ よ

日月・衆星・天神・地神、乃至地獄・餓鬼・畜生・

しゅら にん てん

いっさいしゅじょう

しんちゅう

ぶつしよう

しんちゅう

ひとこえ よ

修羅・人・天、一切衆生の心中の仏性をただ一音に喚

あらわ たてまつ くどく

むりょうむへん

び顕し奉る功德、無量無辺なり。

わ こしん みょうほうれんげきよう

ほんぞん

たてまつ

我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉つて、我が

こしんちゅう ぶつしよう

なんみょうほうれんげきよう

呼 呼

あらわ たも

己心中の仮性、南無妙法蓮華經とよびよばれて顕れ給

ほとけ

い

たと

かご なか とり 鳴

うところを仏とは云うなり。譬えば、籠の中の鳥なけ

そら

とり

あつ

そら

とり

あつ

ば、空とぶ鳥のよばれて集まるがごとし。空とぶ鳥の集ま

れば、籠の中の鳥も出でんとするがごとし。口に妙法を
よび奉れば、我が身の仏性もよばれて必ず顯れ給
う。梵王・帝釈の仏性はよばれて我らを守り給う。仏
菩薩の仏性はよばれて悦び給う。

(48 法華初心成仏抄)

ひとたび御本尊に向かつて南無妙法蓮華経と唱えれば、あらゆる
仏、あらゆる法、あらゆる菩薩、あらゆる声聞、あらゆる梵王、
帝釈、閻魔法王、日月、衆星、天神、地神、さらに地獄、

がき ちくしょう しゅら にんてん

ひと

しんちゅう

ぶっしょう

餓鬼、畜生、修羅、人天、あらゆる人びとの心中にある仏性

だいもく ひとつえ よ

を、ただ題目の一聲に呼びあらわすのですから、御本尊の功德に限

じぶんじしん せいめい そな

みょうほうれんげきよう

りないものなのです。自分自身の生命に備わつてある妙法蓮華経

ごほんぞん くどく かぎ

なんみょうほうれんげきよう とな

じしん せいめい

を御本尊として、南無妙法蓮華経と唱えていけば、自身の生命にそ

ぶっかい よ よ ゆげん

なわる仏界が呼び呼ばれて涌現するのです。たとえば、かごのなかの

とり

そら と

とり

な ごえ

あつ

鳥がさえずれば、空を飛んでいる鳥がその鳴き声によばれて集まつ

てくるようなものです。また、空を飛ぶ鳥が集まつてさえすれば、

こんど

とり そと で

くち

今度はかごのなかの鳥も外に出ようとするようなものです。口に

なんみょうほうれんげきよう とな

じこ せいめい

ぶっしょう

南無妙法蓮華経と唱えれば、自己の生命のなかの仮性もよばれて

こう

こんど ぼんてん

かならずあらわれてくるのです。それに呼応して、今度は梵天、
たいしゃく
しよてんぜんじん ぶっしょう よ
帝釈などの諸天善神の仏性が呼びあらわれて 私たちを守るだ
わたし
まも

ほとけ

ぼさつ

ぶっしょう

よ

よろこ

けでなく、あらゆる仏や菩薩の仏性も呼ばれて 喜ぶのです。

己心と仏心とは異ならずと觀するが故に、生死の夢を覺まして本覚の寤に還るを、即身成仏と云うなり。
即身成仏は、今、我が身の上の天性・地体なり。煩い
も無く、障りも無し。衆生の運命なり、果報なり、冥加
なり。

(049) 三世諸仏總勘文教相廢立 (總勘文抄)
一生成仏・仏界湧現 716 ページー1行

「一切法は皆、これ仏法なり」と通達し解了する、これを
名字即となす。名字即の位より即身成仏す。故に、円頓
の教には次位の次第無し。

(049) 三世諸仏總勘文教相廢立 (總勘文抄)
一生成仏・仏界湧現 717 ページー17行

詮するところ、己心と仏身と一なりと観すれば、速やかに
仏に成るなり。故に、弘決にまた云わく「一切の諸仏、
己心は仏心と異ならずと観じたもうに由るが故に、仏に
成ることを得たもう」已上。これを観心と云う。實に
己心と仏心と一心なりと悟れば、臨終を礙ぐべき惡業も
有らず、生死に留むべき妄念も有らず。

(049) 三世諸仏總勘文教相廢立 (總勘文抄)
一生成仏・仏界湧現 722 ページー5行

煩惱の薪を焼いて、菩提の慧火現前するなり。

(095) 御義口伝

一生成仏・仏界湧現
987 ページー7行

いっしょじょうぶつ

ぶつかいゆげん

おんぎくでん

ぼだいえかげんぜん

ほんのうたきぎや

妙覚の釈尊は我らが血肉なり。因果の功德は骨髓にあらずや。釈には「因を挙げて信を勧む」と。「因を挙ぐ」は、即ち本果なり。今、日蓮が唱うるところの南無妙法蓮華経は、末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり。あに「今者已満足」にあらずや。

(095) 御義口伝

一生成仏・仏界湧現 1004 ページー7行

妙覚の釈尊は私たち衆生の血や肉であり、因果の功德は骨の髓ではないでしょうか。(これは師である仏も久遠元初の

じじゅゆうしん

でし

しゅじょう

くおんがんじょ
じじゅゆうしん

自受用身、弟子である衆生もまた久遠元初の自受用身としてあら
じじゅゆうしん やく していふに あ

われ、自受用身に約して師弟不二であることを明かされていきます)。

しゃく てんだいだいし ほつけもんぐ

いん あ しん すす

また釈(天台大師の法華文句)には「因を挙げて信を勧む」とあ

いん あ ほんが

ほとけ たね

り、因を挙げるのがすなわち本果です。(これは仏の種があることを

さと じょうぶつ

にちれん とな

悟らせることを成仏といふからです)。いま日蓮が唱えるところの

なんみょうほうれんげきよう

まっぽうまんねん しゅじょう

じょうぶつ

南無妙法蓮華経は、末法万年の衆生を、ことごとく成仏せしめ

こんじやいまんぞく

いま すで まんぞく

るのです。どうして「今昔已満足」(今昔は已に満足しぬ)でないと
いえましようか。

いま にちれんら たぐ なんみょうほうれんげきょう とな たてまつ とき
わくしょうさ こしん しゃか たほうじゅう むみょう
の惑障却けて、己心の釈迦・多宝住するなり。

(095) 御義口伝

いっしょじょうぶつ ぶつかいゆげん
一生成仏・仏界湧現 1034 ページー1行

ほけきよう

たも

たてまつ

法華經を持ち奉

るとは、我が身は仏身なりと持つなり。

わ

み

ぶっしん

たも

(095 御義口伝

いつしおうじょうぶつ

ぶっかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

1035

ページー2行

「八」
ひらく

とは、色心を妙法と開くなり。

しきしん

みょうほう

ひら

(095 御義口伝
おんぎくでん)

一生成仏・仏界湧現
いつしょうじょうぶつ ぶっかいゆげん

1039
ページー10行

いま にちれんら たぐ なんみようほうれんげきょう とな たてまつ もの
「成就仏身」 疑いなきなり

(095 御義口伝)

いつしようじょうぶつ ぶつかいゆげん
一生成仏・仏界湧現 1057 ページー17行

ろっこんしようじょう

ひと

るり

みょうきょう

さんせんせかい

六根清淨の人は「瑠璃」「明鏡」のごとく三千世界を

見るという経文なり。今、

いま

にちれんら

たぐ

見るとくに「日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきょう

とな

たてまつ

もの

みょうきょう

まんぞう

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、明鏡に万像を浮かぶ

ちけん

みょうきょう

ほけきょう

るがごとく知見するなり。この明鏡とは、法華経なり。

べつ

ほうとうほん

別しては宝塔品なり。

(095) 御義口伝

おんぎくでん

いつしょうじょうぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

1063

ページー4行)

いっさいそくみょうほう

いっしん

げんてい

あらわ

じんみょう
む
げ

一切即妙法なれば、一心の源底を顯すこと甚妙無外なり。いわゆる、南無妙法蓮華経は不思議なり。

なんみょうほうれんげきよう

ふしきぎ

(095 御義口伝)

いっしょうじょうぶつ

ぶつかいゆげん

一生成仏・仏界湧現

1101

ページー1行

いっしん
一心に仏を見る心を一にして仏を見る一心を見れば仏
なり。

ほとけ
み
こころ
いつ
（099 義淨房御書

ぎじょうぼうごしょ

いっしょじょうぶつ
一生成仏・仏界湧現

ほとけ
み
いっしん
み
1197

ページー11行

ぶつかいゆげん

そもそも、この經釈の心は、仏になる道はあに境智の二法にあらずや。されば、境というは万法の体を云い、智というは自体顯照の姿を云うなり。しかるに、境の淵ほとりなくふかき時は、智慧の水ながることつつがなし。この境智合しぬれば、即身成仏するなり。

(165 曽谷殿御返事 (成仏用心抄)

およその經釈 (法華經を解釈した天台大師の法華玄義の文) の意味は、成仏する道は境智の二法のほかにないので。で

きょう

まんぽう

たい

ごほんぞん

ち

すから、境というのは方法の体（御本尊）をいい、智というのは

じたいけんしよう すがた

自體顕照の姿をいうのです。しかも、境のふち（淵）が際限が

ふか

ちえ みず なが

ししよう

ないほど深いときには、知恵の水が流れるのになんの支障もありま

きょう みょうごう そくしんじょうぶつ

せん。この境と冥合すれば即身成仏するのです。

たほうによらい ほうとう くよう たも 思 そうら
多宝如來の宝塔を供養し給うかとおもえば、さにては候
わづ、我が身を供養し給う。我が身また三身即一の本覺の
によらい

如來なり。

かく信じ給いて南無妙法蓮華經と唱え給え。

(263) 阿仏房御書 (宝塔御書)

一生成仏・仏界湧現 1733 ページー3行

しかれば、久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我ら衆生との三つ全く差別無しと解つて妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脉とはいうなり。

(276 生死一大事の血脉抄)

一生成仏・仏界湧現 1774 ページー17行

さて、久遠実成の釈尊（日蓮大聖人）と、あらゆる衆生を成仏せしめる法華経（文底獨一本門の大御本尊）と、私たち衆生との三つは、まったく差別がないと信じ理解して、

なんみようほうれんげきよう　だいもく　とな
南無妙法蓮華経の題目を唱えていくことを、生死一大事の血脉

とい
うの
で
す。

「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し、毘盧の身土は
凡下の一念を逾えず」

(280 諸法実相抄)

一生成仏・仏界湧現
1788 ページー12行

ほうとうほん

ただいま

この宝塔品はいざれのところにか只今しますらんと
勘くわん そうちら にちによごせん おんむね あいだ はちよう しんれんげ
かんがえ候こうえば、日女御前ひめごぜんの御胸おんむねの間あいだ、八葉はちようの心蓮華しんれんげの
内うちにおわしますと日蓮にちれんは見まいらせみて 候こう。

(406) 日女御前御返事にちによごせんごへんじ (ぞくろいほんとうたいい こと)
(嘱累品等大意ぞくろいほんとうたいいの事)

一生成仏・仏界湧現いっしょうじょうぶつ ぶつかいゆげん
2096 ページー3行)

ほけきょう

われ

み

ほっしんによらい
われ
こころ

われ

こと

この法華経には、我らが身をば法身如來、我らが心をば
報身如來、我らがあるまいをば應身如來と説かれて候え
ば、この經の一句一偈を持ち信ずる人は、皆この功德を
そなえ候。

具

そうちう

きょう

いっくいちら
たも

しん

ひと

みな

くどく

ほうしんによらい

われ

振

舞

おうじんによらい
と
そうちう

ほうしんによらい

われ

振

舞

おうじんによらい
と
そうちう

(407) 妙法尼御前御返事（一句肝心の事）
みようほうあまごぜんごへんじ
いつくかんじん
こと

一生成仏・仏界湧現
いつしようじょうぶつ
ぶつかいゆげん

2098 ページー13行

さて、この經の題目は、習い読むことなくして大いなる
善根にて候。悪人も女人も、畜生も地獄の衆生も、
十界ともに即身成仏と説かれて候は、水の底なる石に
火のあるがごとく、百千万年くらき所にも灯を入れぬ
ればあかくなる。世間のあだなるものすら、なお、かよう
に不思議あり。いかにいわんや、仏法の妙なる御法の
御力をや。我ら衆生の惡業・煩惱・生死果縛の身が、
正・了・縁の三仮性の因によりて、即ち法・報・応の
三身と顯れんこと、疑いなかるべし。

（407

妙法尼御前御返事

（一句肝心の事）

みようほうあまごぜんごへんじ

いつくかんじん

こと

一生成仏

・仏界湧現

2100

ページー4

行

いつしょうじょうぶつ

ぶつかいゆげん